

日米医学医療交流財団 留学助成

A項研修報告書 (2008年度 助成者)

作成日 2012年1月19日

氏名 中山郁恵

研修先機関名 **Pennsylvania Hospital**

研修期間 2008年 8月から2011年7月

現在所属機関名 **Deaconess Medical Center**

分野 **Internal Medicine**

役職 **Hospitalist**

日本での3年間の研修後、マッチングを通して内科のレジデントとして働きました。

Pennsylvania HospitalはDr. Thomas Bond と Benjamin Franklinが1751年にフィラデルフィアに設立したアメリカで一番古い病院です。病院の一部は建物がそのまま残されています。以前、精神科病棟として使用させていた部分は、カンファレンスルームや読書室になっています。解剖室は原型のまま温存されており、時々ツアー客も見受けられます。その古い建物にはコンピュータールームやソファーもあります。共同の当直室は明かりや電話の音でゆったりできないため、当直中その部屋で仮眠をとることもありました。そこには、幽霊が出るといううわさもあり、いつもなにかヒヤッとする静けさがありドキドキしながら休憩していた日々を思い出します。

日本で初期研修が必須になり、各病院で研修医にとって魅力的な研修を作ろうという環境が前にも増して日本で活発になってきています。その流れは、アメリカとの研修内容と匹敵するレベルにあがってきているのではないかというのが私の考えです。沖縄研修病院で2年間、浦添総合病院で1年間研修しました。一人である程度一人前としてやっていける自信がついてきたころでした。アメリカに来て周りを見て臨床的に十分やっていけるという自信は、異国の土地で生き延びる上で必要不可欠だと思いました。なぜなら、言語や文化の違いというハンディーがつきまとうからです。

はじめは英語を道具としてうまく利用できないハードルを乗り越える必要がありました。その後、英語のやりとりを自由に操れたかとおもうと、コミュニケーションのハードルにぶち当たりました。Aの意味で発した言葉なのに、なぜかBとして捉えられるのです。日本には以心伝心という言葉ありますが、アメリカでは危険です。解釈は人それぞれで、何度も念には念を押しておかないと誤解を招くためです。解釈の違いは、文化の違いであったり、人格の違いであったり、その場の環境の違いであったりします。そして最後に言葉を武器にする能力をつけなければならないハードルがありました。自分自身の価値をあげるためには、常に自分の立場や考えを相手に示し続ける必要があります、特に何か過ちを犯した場合は相手の理解が必要となり

ます。黙ってこつこつ仕事をしているだけでは知らないうちに罪がかぶされているという場合があるからです。

研修で学んだものはいろいろありますが、私が一番感謝しているのは、そこで得たかけがえのない友人です。2人のインド人と一人ずつの香港人、中国人には、必要なときに手を差し伸べてくれた心からの親友でした。彼らは、アメリカに生き延びるだけのたくましさと賢さがあります。そして、大変な研修を乗り越える中で友情が芽生えました。

一時帰国すると、同じ人種の集団をみるとその勢いに唾然とすることが多々あります。そしてその集団の中で、アメリカで生活している自分の存在がいびつに感じる場合があります。しかし、アメリカでまったく違う人々と生活は、無意識に違いよりも共有できるところ共有することに気が向きます。そしていつのまにか表面的な違いに気づかなくなります。私はその自由な心構えが好きです。

研修を終了し、いまはホスピタリストとして勤務を始めました。これまで研修時代が長く、やっと一人前として働けることに喜びを感じています。まだ始めたばかりですが、人との出会いを大切に仕事をしていきたいと思っています。